

報告の概要

予防的回避によるケイパビリティの制約と 共同性の喪失

区域外原発事故被害の核心

成 元 哲
中京大学
福島子ども健康プロジェクト



- 避難区域外の「福島子ども健康プロジェクト調査」から原発事故被害をどう捉えるかを検討
- 1. 予防的回避
- 2. ケイパビリティ(の制約・剥奪)
- 3. 共同性の喪失

☆ケイパビリティ・アプローチの特徴は、一人ひとりの個人が被っている不利性をより客観的に、けれども可能な限りその人の総体において捉えた上で、適切な資源再分配政策を構想しようとする点にある(後藤玲子)

名も無き人びとの夥しい数の声

- 20世紀の科学技術の粋を集めた原子力発電所で起きた<新しい種類の災難>、これに遭遇した普通の人びとの言葉
- ある日突然、それまでの日常から引き離され、不条理を感じながら、非日常を日常として受け入れざるを得なくなった名も無き人びとの声
- この7年余の間、それがどのように変化してきたか、自由記述欄に書き込まれた85万7千字余のあふれる言葉から明らかにする

調査対象地域

- **福島県中通り9市町村**：
福島市、郡山市、二本松市、伊達市、本宮市、桑折町、国見町、大玉村、三春町
- 避難区域外、自主的避難等対象区域(中間指針)
- 放射線量は避難区域より低い、局所的なホットスポットが存在する

なぜこの地域を選んだか

- 避難区域の隣接地域として、被害の裾野の広がりを体現する地域
- **健康影響の不確実性の高い地域**。リスクへの対処が先鋭に問われる地域
- リスク認知や対処行動の違い、補償格差などによる葛藤・分断が生じやすい地域



調査対象者

□福島県中通り9市町村に在住する2008年度出生児(2008年4月2日～2009年4月1日生まれ) 6,191名全員とその母親(保護者)

➤2012年10月～12月に、9市町村の住民基本台帳から対象者を抽出

➤対象者は、原発事故当時、1～2歳で外遊びが本格的に始まる年齢。

2013年1月の第1回調査時点で3～4歳。

2018年4月、小学校4年生

調査方法:同一対象者への追跡調査

第1回 (2013年)	第2回 (2014年)	第3回 (2015年)	第4回 (2016年)	第5回 (2017年)	第6回 (2018年)												
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C												
6191	2628	42.4	2628	1606	61.1	1605	1209	75.3	1297	1021	78.7	1026	912	88.9	1019	819	80.4

A:調査対象者数 B:回答数 C:回答率(%)

2018年3月31日の時点での数

2018年7月29日、830通(6回合計:8,206通)

自由回答欄の変化

	回答総数 (2018/3/31時点)	自由回答 記入数	記入率	文字数	平均 文字数
第1回	2,628	1,203	45.8%	252,047	209.5
第2回	1,606	718	44.7%	153,938	214.4
第3回	1,209	746	61.7%	151,677	203.3
第4回	1,021	612	59.9%	117,171	191.5
第5回	912	549	60.2%	100,690	183.4
第6回	819	445	54.3%	81,588	183.3

857,111

原発がなかったら・・・

原発がなかったらさせてあげられる遊びや経験がたくさんあると思う。海水浴や外での遊び。月日がたつて、外で過ごせる時間も多くなつたように思われるが、自分の子どもの頃とくらべるとホントに少ない。食生活では、安全とは言われても、あれば、高い値段でも、他県の商品を買い求め、水(飲料水)は、いつも買い求めている。うちのような、母子家庭で、収入の少ない家庭では、大きな問題です。でも、子どもの健康を考えると、買わざるをえないし、やはり、将来がとても心配。もし、病気になったときに、こうかいしたくない・・・。あの時、ちゃんとしていればと・・・。この先、結婚する年齢をむかえた時にも、原発のあった、福島の子だからと、相手の方からけねんされることはないだろうかとか、考えれば、考えるだけ問題はつきないのですが・・・。今でも、地震が起きれば、子どもから笑顔が消え、こわがり、身がまえます。(中略)この不安な気持ちは、これから先も消えることはないと思います。これから先ずっと・・・(2013:ID7)。

不安・心配2014年

放射能への不安について。自分自身、放射能がある生活に慣れてしまったことに不安を感じる。家の周辺は約0.2μsvと決して低くはないが(と思っている)こんなものだと思って暮らしていることにたまにハツとする。食べ物について、市場に出回っているものは大丈夫だとは思っているのだが、「福島県産」となっていると、つい手を引っこめてしまう自分がある。何か重要なこと(情報)が後々出てくるのではないかと、不安である(2014:ID113)。

避難から帰還した人は

まだ5年、もう5年 そんな心境です。震災後、避難して2年後にまた福島へ戻ってきました。福島産の野菜や米は、食べないようにしたり、外遊びに抵抗を感じたり、戻ってきた直後は、いろいろ気を使っていましたが、今は空間線量もだいぶ下がり、大手スーパーなら、信頼できるかな・・・と福島産のものを購入したり、外遊びは全く心配しなくなりました。ただ、10年後、20年後のことが、不安になってきています。子供達が、病気にならないでこのまま元気でいけることを願うばかりです(2016:ID38)。

不安・心配2017年

もう忘れたいという思いと、子供達の将来の健康について不安があるので、心配し続けなくてはならないという思いと、反対の思いがあります。何が真実だったのか、何が今の真実なのか、結局分からないまま6年がたっしまいました。両家の両親も、福島県内在中なので、このままこの地で、ずっと暮らしていきたいと思いますが、子供達の事だけが最後まで心配です(2017:ID247)。

自由回答欄で最も多いのは不安

- 「不安」か「心配」、あるいは両方を書いている人数:589人(第1回)、声の数:1,335(第1回)
- 自由記述全体のなかで「不安・心配」が占める割合が5年間ほぼ一定(60%前後)
- 不安・心配の内容は、健康、放射能、生活、避難、人間関係、賠償、情報、将来などの割合が変化している

不安・心配の割合ほぼ一定

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
「不安」を書いている人数	453	232	256	174	164
「心配」を書いている人数	250	141	151	126	112
「不安」か「心配」or両方書いている人数	589	316	344	253	243
「不安」「心配」以外の言葉で書いている人数	217	116	147	113	94
自由記述総数	1203	718	746	612	547
「不安」「心配」を書いている人の割合	67.0%	60.2%	65.8%	59.8%	61.6%

*1人の方で、複数の分類の「不安」「心配」の言及がある場合、複数でカウントしています

第1回調査	不安・心配の内容	人数	不安・心配の総数に対する割合	自由記述の総数に対する割合
「健康」	将来の健康不安	225	16.9%	18.7%
	現在の健康不安	60	4.5%	5.0%
	抵抗力低下による健康不安	41	3.1%	3.4%
	出産	8	0.6%	0.7%
「生活」	被災	61	4.6%	5.1%
	不安定	0	0.0%	0.0%
	外出が	150	11.3%	13.8%
	食べたい・飲みたくない	102	7.6%	8.5%
	子育て	10	0.7%	0.8%
「人間関係」	変化による	118	8.9%	9.8%
	いじめ・差別	9	0.7%	1.0%
「賠償」	両親との関係が	55	4.1%	4.9%
	賠償制度	17	1.3%	2.1%
「情報」	放射線不安	70	5.2%	5.8%
	偽情報	15	1.1%	1.3%
「その他」	「不安や種」による場所について	22	1.7%	1.9%
	避難先での「不安」	52	3.9%	4.3%
	本調査に対する「不安」	24	1.8%	2.0%
	原発事故への対応、不安、不安	11	0.8%	0.9%
	「不安」「心配」はかい	11	0.8%	0.9%
	経済的な「不安」	2	0.2%	0.2%
	家族の健康「不安」	4	0.3%	0.3%
	事故と関係のない不安	32	2.4%	2.7%
	災害・避難生活の不安	61	4.6%	5.1%
	避難したことが原因の不安	5	0.4%	0.4%
不安があるが何を言えない	10	0.7%	0.8%	
その他	97	7.3%	8.7%	

1335 (声の数) 256 (自由記述の総数)
*「その他」は自由記述の中で、上記の分類に当てはまらないもの

不安・心配(割合)



不安・心配の変化

- 「将来の健康不安」が持続する通奏低音
- 食、外遊び、除染など生活上のリスクは年々減少している
- 「いじめ・差別、結婚不安」など人間関係の不安が増えている

図13 福島県民、以下のようなことはありましたか、それぞれの項目について、
もっとも正しいもの一つに○をつけてください。

	あてはまる	どちらか一方 あてはまる	どちらか一方 あてはまらない	あてはまらない
洗剤類の成分は怖い	1	2	3	4
洗濯物の外干しはしない	1	2	3	4
放射線量の多いところには近づかない	1	2	3	4
できることなら避難したいと思う	1	2	3	4
放射線の健康影響についての不安が大きい	1	2	3	4
福島で子どもを育てることが不安を感じる	1	2	3	4
原発事故によって親子関係が不安定になった	1	2	3	4
放射線に曝してどの程度が正しいかわからない	1	2	3	4
放射線への対応をめぐって夫(配偶者)との認識のずれを感じる	1	2	3	4
放射線への対応をめぐって両親との認識のずれを感じる	1	2	3	4
放射線への対応をめぐって近所や同僚の人と認識のずれを感じる	1	2	3	4
原発事故の被害をめぐって不公平感を感じる	1	2	3	4
原発事故後、噂やいさげが増え、健康被害を感じる	1	2	3	4
原発事故後、福島に暮らしていることについて不安を感じる	1	2	3	4



4つの傾向

1. **高止まり型**: 補償不公平感、情報不安、いじめ・差別不安(今も半数以上の人)
2. **緩やかな減少型**: 健康影響不安、経済的負担感、保養意欲、福島での子育て不安(4割程度の人)
3. **急激な減少型**: 地元産食材の不使用、洗濯物の外干ししない、避難願望(ただ今も約2割)
4. **低めの不変型**: 放射線への対処をめぐり認識のずれ

→ 全体的に「回復」傾向にあるが、「不安、不公平感、負担感、認識のずれ」が続いている

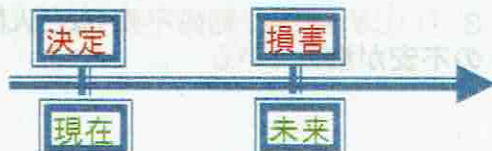


原発事故被害をどう捉えるか

- 事故直後、「直ちに健康への影響はない」という言葉から始まった
- **原発事故の被害は予防的回避を強いられることによって生じる**
- 予防的回避は、①潜在的に有害な影響が起こり得るリスクの存在と②そのリスクを科学的評価によって確定できない/科学的不確実性が高いとき、作動する。
- 既に発生した被害もこれから生じるかもしれないリスクも統一した視点から捉えるための概念 → 予防的回避

予防的回避

1. **損害の発生ないしそのおそれが、何かをするか放置しておくかについての決定と結びつくとき、この決定を予防的回避という。**人間の振る舞いを「帰属」という観点から記述



「**することも・しないことも可能である現在の決定**」によって「**生じるかもしれない・生じないかもしれない未来の損害**」の可能性が生じる。

予防的回避

2. **時間の問題、未来の問題。**未来においてはじめて、したがって決定を不可逆的に過去のものにしてしまう現在においてはじめて観察され得る。予防的回避(決定)の瞬間は、未来はあくまでもリスクを伴っている。
- **予防的回避の必然的帰結 → 将来の不安**

予防的回避

- 3. 決定を行う人と決定により影響を被る人との間に、リスクの見方は一様ではない。同じ事象に関するリスクであっても、決定者とそれにより影響を被る人びととの間に著しい相違が生じる
- 帰属をめぐるコンフリクト: 原因の帰属、責任の帰属

ケイパビリティ(潜在能力)

- 人が「何かになったり、何かをしたりする」可能性(ヌスパウム)。**潜勢的可能性**(橋本努)
- ケイパビリティ・アプローチの特徴は、一人ひとりの個人が被っている不利性をより客観的に、けれども可能な限りその人の総体において捉えた上で、適切な資源再分配政策を構想しようとする点にある(後藤玲子)

潮見損害論

- 「損害の公平な分配」から「権利の価値の保障」への転換、**権利論を回避した損害論は無意味である(潮見)**
- **生命・身体の危殆化(危険の現実化)回避行動の観点からの損害補足**⇒避難費用、除染費用などは財産的損害として捉えられる。予防原則の下で権利・利益保全費用の賠償を認めることは、**情報収集リスクの自己負担原則に対する修正を意味する**

ケイパビリティ(選択可能集合)

- 「人が自ら価値を認める生き方をすることができる**自由**」(アマルティア・セン『自由と経済開発』)
- 「機能」は一定の財・資源を利用して実現される個人の行いや在りよう。例)コミュニケーションをする、移動する、痛みを逃す。
- 潜在能力とは、本人が利用可能な財・資源と本人の財・資源変換(利用)能力のもとで、実現可能となる**複数の機能の組み合わせ方(機能ベクトルの集合)**(後藤玲子『潜在能力アプローチ:倫理と経済』)

予防的回避によるケイパビリティ侵害

- 健康:結果的に問題がなかったとしても、健康が害されるかもしれないという不安から自由になっていない/ならない
- 避難:故郷に戻れる自由がありながら戻らないのと、その自由がないのとは違う
- 外遊び制限による子どもの成長・発達への影響:自転車があるのに乗れない
- 福島県産の食材、...

参照:吉田文和2016「ケイパビリティ・アプローチに基づく原発事故の被害評価」植田和弘編『被害・費用の包括的把握』

潮見損害論への応接

- 権利論的転回というより、ケイパビリティ論的転回(諸機能や自由)
- 善き生を求めるに当たって**人間の多様性と、人間の諸機能**(行いうること、なりうること)と**自由**が剥奪されていることが看過されていないか
- ケイパビリティ・アプローチを回避した被害論は無意味である。例えば、原発事故被害を避難に焦点化することの陥穽。避難できなかった人の声にも配慮を!

どう拾い上げるか(記述・測定)

- ユニセフのイノチェンティ研究所の「レポートカード11 先進国における子どもの幸福度—日本との比較 特別編集版」、子どもの幸福度を5つの分野20項目で評価
- 1. 「物質的豊かさ」
- 2. 「健康と安全」
- 3. 「教育」
- 4. 「日常生活上のリスク」
- 5. 「住居と環境」

原発事故さえなければ

- 『原発事故さえなかったら』と、何度もくり返し思う。外あそび、散歩が大すきな息子は当時2才。毎日自分の興味に沿い、外遊び、自然遊びを楽しんでいた。毎日子どもの目線で新しい発見があり、親も純粋に子どもの感性に感動していた。子ども中心のゆったりとした、ささやかなあたり前の日常があった。子どもの成長が幸せだった。原発事故後、素人の母親は子どもを守るため、情報を必死に集め、自己責任で行動を選択することを強いられた。引越しもし、家族の形も変わり、結果、母子二人で実家に戻り、現在に至る。ささやかな日常の中にあつた輝いていた幸せがなつかしい(2016年調査)

自転車に乗れない

- 震災前、私はこの街が好きでした。郡山で生まれ、郡山で育ち、郡山で結婚し、郡山で出産しました。1度も他の県に住んだことはありません。しかし、原発事故以降、この街がとてつもなく、あまり好きではありません。できる事なら、放射能の値が低い土地に移り住みたい気持ちがあります。しかし、親・兄弟がこの福島に住んでおり、仕事も家もあります。また、他の県で知らない人、土地で生活する勇気も自信もありません。震災前のような生活に戻りたいです。近所の公園でも遊ばなくなりました。いつも子供達がいた公園には誰もいなく、閑散としています。私達も公園で遊びたい時は車で1時間以上移動して、遠方の公園まで行っています。震災前買った自転車はほとんど乗ることなく、サイズが小さくなってしまい、6歳の息子は未だに自転車に乗れません。震災直後、買い物に行き、途中大雨になりました。夫が店の側まで車をもってきてくれるのを店の軒下で待っていたとき、軒下から落ちてくる雨が娘がすくってなめました。その行為を見て私は「ダメ」とたたいて、怒ってしまいました。娘は何がダメなのかわかっていなかったようです。今まではこんなことで怒ったりしていなかったのに...と生活の変化に悲しくなり涙がこぼれました。こんな毎日で心身共に弱るのは普通に思います。また、毎日取られている市住民税もとても高く感じます(2013:ID351)。

予防的回避

- 1. 原発事故さえなければ
- 2. 子どもの生活(外遊び制限、保養、成長・発達への影響)
- 3. 住まい(避難)
- 4. 食
- 5. 人間関係の不安

避難と帰還をめぐる苦悩

- 「5年。長く暗いほら穴にいたような年月が流れました。でもまだはじまったばかり.....子どもたちの成長を思えば、たったの5年ですね.....。避難者は住宅補助打ち切りを前に、大きなわかれ道に立っています。私の避難した地域に来た人たちのほとんどは、同じ地域又は近くの地域に家を購入し、根をはりつつあります。中には、その選択も、帰る選択もできず心の病気に陥るお母さんもいます。様々な選択を受け入れられる社会であってほしいです。そして私たち家族はこの春帰郷する選択を選びました。苦悩の日々の結果です。嬉しくもあり不安でおしつぶされそうでもあり.....。でも違う意味で肩の荷をおろしたいです(2016年調査)

そうか、忘れていたけど忘れられない

7年...。すっかり震災のことは日頃忘れてしまっています。除染している作業も山積みになった除染土も他県からみれば異様な風景なのにもう普通となっています。除染作業している所を普通に子供を連れた車で通りすぎる... 人は忘れてしまうものなんだと実感してしまいます。それでも、やっぱり子供の身体のことには心配だし、地震の小さな揺れにもいまだに動揺します。そうか...。忘れていたけど忘れられないのです。(2018:ID762)。

持続する将来不安

- 社会学者カイ・エリクソンのTMIの被害者の取材から
- **RADIATION'S LINGERING DREAD**. By KAI ERIKSON. Radiological emergencies violate the rules of plot- some, but not all, have clearly defined beginnings, but to the victims, they never end; the "all clear" never sounds. [Bulletin of the Atomic Scientists](#) Volume 47, 1991 - [Issue 2](#)

Continuous Traumatic Stress

- ①ストレス源となる状況の時間軸が過去ではなく現在・未来にあること
- ②リアルな脅威と認知・想像される脅威とを区別するのが非常に難しいこと
- ③外部の防護システムが不在であることが、その特徴である。

出典: Eagle, G. & D. Kaminer, 2013, Continuous Traumatic Stress: Expanding the Lexicon of Traumatic Stress, *Peace and Conflict: Journal of Peace Psychology*, Vol.19, No. 2; 85-99

今、必要なこと

- 1. 多様な選択を可能にする支援策
- 2. 特に、**保養と放射能被害補償法**
- 原発賠償の終期: 政府の事故収束宣言を根拠に区域外避難の期限を原則2011年12月。
- 損害額: これまでの判決請求額の1割認容
- 原発事故で問うべきは狭義の健康被害ではなく、(平穩)生活権。生活権なら、生活、健康、情報、人間関係の不安は含まれる。
- →これまでの判決の加害責任を踏まえて被害者救済立法に進む時期。挙証責任の転換

チェルノブイリの場合

・「戦争の場合、過去の経験に何度も気持ちが戻っていきますけれども、原発事故の場合は、未来に対する不安、子どもたちに障害が起こるのではないかといったことを生涯考え続けるわけです」コンスタンチン・ロガノフスキー教授(ウクライナ放射線医学研究センター)

木村真三『「放射能汚染地図」の今』講談社
2014年(191頁から引用)

福島親子の新しい日常

1. 「不安」から「前向き」へ一直線に推移しているわけではない
2. 個人の内面においても全体の傾向としても、**CTS**(持続する将来不安)と**PTG**(過酷な体験後の前向きな生活態度・心的態度)が**併存する状態**
⇒螺旋状or反転図形(ルビンの壺)
3. CTSを減らし、PTGを増やすには**多様な選択を可能にすること**、また、「**放射能健康被害補償法**」など恒久的な法制度の整備が必要